《巻頭言》

ウィズコロナ下での研究

理事・副学長（研究・地域連携担当）　二見 亮弘

大学では教員の自主性に基づく多様な研究が尊重されていますが，自由に伴う責任や，研究に参加する学生への教育効果，経費や研究環境の確保の問題など種々の制約の中で，適切と思われる研究テーマや研究方法が選択され，実施されているといえるでしょう。

そんな中で，今年度も研究年報を刊行できることを喜ばしく思い，日頃より皆様方からいただいているご理解とご支援に改めて御礼を申し上げます。地域と共に歩む人材育成大学として，また地域とともに 21 世紀的課題に立ち向かう大学として，今後も研究を基盤とする社会貢献を進めて参りたいと存じますので，どうぞよろしくお願い申し上げます。

さてここで，「ウイズコロナ下での多様な研究」について個人的心配事を少し述べてみたいと思います。まずは一般論ですが，真理や真実の探求に関わる研究でも，社会的ニーズに直接応えるための研究でも，方法や主張点に学術的な新規性や有効性が含まれ，それを人が理解できるように説明し文書化することが求められます。それによって知の集積と利用と進展が可能になるからです。

ここまでは学問分野によらない共通点だと思えますが，そのような成果が得られるまでの過程には，研究者の個性や価値観，研究環境などが強く影響します。また，真理の探求という時の真理とは何か，それは存在するのか，人間の理解力の限界はどう作用するのか，他の枠組では理解できないのか，などと考え始めると，哲学者や宗教家を除けばあまり生産的な思考に結び付かず，原点に立ち帰るばかりになってしまうでしょう。よって，楽天的な思考や研究者同士の交流・刺激が不可欠に思えます。また，社会貢献の重要度が大きい研究では，どんな集団のどんな評価量を最適化しようとするのかについて様々な立場が存在したり，定量的な解析ができない因果・相関関係が複数存在する場合も多く，何が最適解なのかを判断することは困難なことが多いでしょう。

よって結局は，研究の動機や目的によらず，各研究者が相互に影響を与え合い，各人の自主性に基づいて多様な思考と発想を行い，正しいと思う研究を行い，研究者同士がそれを正当に評価し合い，社会への還元や次のレベルの理解に向けた研究につなげていくという作業が行われてきていると思えます。そして，そのために最も重要なものは，研究者同士の議論や情報交換です。

昨今のコロナ禍により，学会・研究会の中止やオンライン化が起きています。実験や調査に関わる新たな制限も生じています。その結果，十分な議論の機会や新しい着想を得る機会が減ってしまっていないか心配です。社会的に広がっていく閉塞感も研究者の活力に悪影響を与えそうです。

さまざまな工夫によって研究者同士の交流や議論の質と量を確保していく努力が，今まで以上に求められる時代に入ったように思います。